

2020年6月5日

上智大学 吉田研作

## 1. 学習指導要領と大学入試

## 内容の取扱い

- (1) 中学校におけるコミュニケーションを図る資質・能力を育成するための総合的な指導を踏まえ、五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、総合的に指導するものとする。
- (2) 中学校における学習との接続のため、既習の語句や文構造、文法事項などの学習内容を繰り返したり、特にこの科目の学習の初期の段階においては中学校における基礎的な学習内容を整理したりして指導し、定着を図るよう配慮するものとする。

教育課程実施状況調査の結果 (中学で3級以上、高校で準2級以上が多い学校)

## ■生徒の英語力に関する指標と相関が見られる調査項目

中学生 (CEFR A1レベル(英検3級)相当以上)	高校生 (CEFR A2レベル(英検準2級)相当以上)
・小中連携の実施 (特に小中連携カリキュラム作成)	・ICTを活用している学科の割合
・教師が発話を概ね(75%以上)英語で行っている割合	・CEFR B2相当以上の資格を有する教師の割合
・授業の大半(75%以上)で生徒の言語活動を行っている学校の割合	・ALTを活用した授業時数の割合
・話すこと・書くことのパフォーマンス評価の実施割合	・「話すこと」「書くこと」のパフォーマンステスト(評価)を実施する学科の割合
・ICTを「話すこと」の言語活動に活用している学校の割合	・授業の半分以上で生徒の言語活動を行っている学科の割合
等	・教師が発話の半分以上を英語で行っている学科の割合 等

## 中学校学力試験の結果

(指導改善に向けて(今後3年を見通して))

## ○新学習指導要領(平成30年度から移行期間開始)に示した取組を着実に実施する。

- ・一文一文を聞き取る・読み取るだけでなく、目的・場面・状況等に応じて聞く・読む言語活動を充実させる。
- ・文法事項等を言語活動の中で理解し定着させる(和文に対応した穴埋めや語順整序だけではなく)。
- ・即興のやり取りをはじめとして、話すこと・書くことの発信の言語活動を充実させる。

## ○生徒の英語学習の意欲を高める。

- ・授業を実際のコミュニケーションの場面とする。
- ・生徒の関心に応じた話題を取り上げる。
- ・学習成果を適切に評価することで、学習意欲の向上を図る。など

## 2. 4 技能試験の導入

国として4技能（5領域）のテストを作成し実施できれば最も好ましい

問題点：

1. 一度の試験で50万人のスピーキングとライティング力の測定、評価が可能か

2. 1月の第3週に限定された共通試験で良いか

今回のコロナ禍、予想されるインフルエンザ、今後も現れうるコロナ禍の第2、3波、新たな感染症の多くが秋冬にやってくることで、全国一斉だと気候等で受験生にとって問題が多い。来年1月も現段階で本当に実施可能かどうか分からない

3. 今後考慮しなければならない入試の形

1) 受けやすい時に受けられる態勢の構築（夏も近年は天候の急変などにより、テストのための日にちを限定することが難しくなる）

2) できれば、年に数回（例えば、季節ごとに1回計4回）は実施できる態勢が必要になるのではないかと（分散受験を可能にする）

3) できるだけCBTで行い、全国にテストセンターを設ける

4) オンラインでアダプティブなテストの形でできれば良いのだろうが、セキュリティーの問題、通信回線の問題（現在のオンライン授業もインターネットが不安定になりがち等）をどう解決するか。また、アダプティブにするためには、現在のセンター試験のような公開テストでは無理。

4. 民間の4技能試験の活用

1) 英検（特に2級まで）、G-TEC、ケンブリッジ英検などは元々英語能力測定テストではなく、学校で学んだレベルごとの英語力の測定を目的としてきた。学習指導要領を前提としており、診断的要素が含まれる。学習指導要領が定める高校卒業程度の英語力を測定するのに適している。特定領域に限定されない一般的な英語力の測定。

→ 高校までで学ぶべき英語力がどこまで身についたかを測定

2) TOEFL、IELTS、TEAPなどはアカデミックな英語力の測定を目標としており、一見すると学習指導要領の目標に反すると思われがちだが、学習指導要領を見ればディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、ライティングは目標とされているので、これらのテストで求められている英語力も学習指導要領に沿った授業を展開すれば十分準備ができると考えられる

→ 英語で大学等の高等教育機関で学ぶに適した英語力の測定

- 3) 1 上記 1) と 2) を CEFR のような共通尺度を用いて標準化することで統一を図る。

英語力等の測定は一点きざみではなく、初級、中級、上級というように、一定の幅で判定されのが一般的（点数表示されても、何点から何点までは上級とか中級というように判断されるのが普通。従って、CEFR の A1 から B1 か B2 のようなバンドで測定することが適していると言える。

\*テスト間の信頼性は、第3者機関で行う（CEFR との整合性）

本来なら全ての民間テストを同一受験者が受けて相関がとれれば良いのかもしれないが、現実的に難しい。

一つの案として、完全ではないが、どれか一つのテスト（例、TOEFL）をアンカーテストとして定め、TOEFL と英検、TOEFL と G-TEC、TOEFL とケンブリッジ、TOEFL と IELTS、TOEFL と TEAP というように、TOEFL を受けると同時に少なくともその他何か一つのテストを受けて TOEFL との相関という方法はできないか

5. 最後に、大学から9月入試の導入を考える必要があるのではないか（4月を含めて年2回でも良い）。特に今年の受験生は、来年1月の共通テストができるかどうか、非常に不安だろう（遅らせるとなると、各大学も入試日程が使えなくなる可能性があるので大学も非常に困る）。ならば、9月入学を視野に大学入試改革を考える必要があるのではないか

→ 英語については、年複数回のテストが受けられれば、それも可能になるのではないかと。英語以外のテストは、実施を遅らせることは可能だろうが、年一回は変わらない。あるいは、例えば、IB などの考え方を取り入れることにより、現在の入試のあり方を変えられないか。